

I 調査結果の概要

- ① 利用団体のプロフィールとしては、センターの代表的な利用者が小学生で、1泊の利用が最も多い。利用団体の種類は、学校関係が全体の半数を占めており、特に小学校は全体の約3割である（図1～図3）。
- ② 利用目標は、全体では半数以上が「自主性や協調性、社会性を身につける」であるが、これは1泊以上の宿泊をとる利用の場合に見られる傾向で、「0泊（日帰り）」の場合は「その他」が最も多い。また、利用団体の種類別で見ると、「その他団体等」の場合では利用目標「その他」が2割以上を占めている（図4、図5、図7）。
- ③ 利用目標の達成度は殆どが「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」であり、特に、利用目標が「自然に対して興味・関心を持つようになる」や「その他」の場合では、「期待以上にできるようになった」が3割前後に達している（図8、図12）。
- ④ 利用後の参加者の変容の上位3項目は、「時間を守るようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「周りの人に優しく接するようになった」で、「時間を守るようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」などは、1泊以上の宿泊をとる場合に顕著に見られる。一方、「0泊（日帰り）」では「その他」の変容が最も顕著である（図13、図16）。

II 調査の概要

1. 目的

本調査の目的は、静岡県立朝霧野外活動センター（以下、センターと呼ぶ）利用団体のセンター利用による教育的効果を明らかにすることである。それにより、施設の評価は利用者数の増減に頼るところが大きい中、それ以外の評価指標としての基礎資料を提示する。

2. 内容

上述の目的を達成するために、センター利用による教育的効果に関する調査を行うが、その内容は以下の通りである。

- ・利用団体の種類
- ・利用団体の主たる年齢層
- ・利用宿泊数
- ・利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）
- ・利用目標の達成度
- ・利用後の参加者の変容

3. 対象

平成 19 年度のセンター利用団体

4. 方法

質問紙による配付回収法で、具体的な手順は下記の通り。

- ・センター担当職員が、各利用団体担当者に、利用期間中にアンケート形式の質問紙（別紙見本参照）を配付する。
- ・各利用団体担当者は、センター利用後約 1 ヶ月の間に質問紙に回答し、回答済の質問紙をファックスでセンター宛に返送する。

5. 調査票（質問紙）の回収状況

回収数（率） 159（36%） 有効回収率 159（36%）

なお、ここで算出した回収率・有効回収率は、平成 19 年度における統計上のセンター利用団体数（447 団体）を母数としている。

6. 実施期間

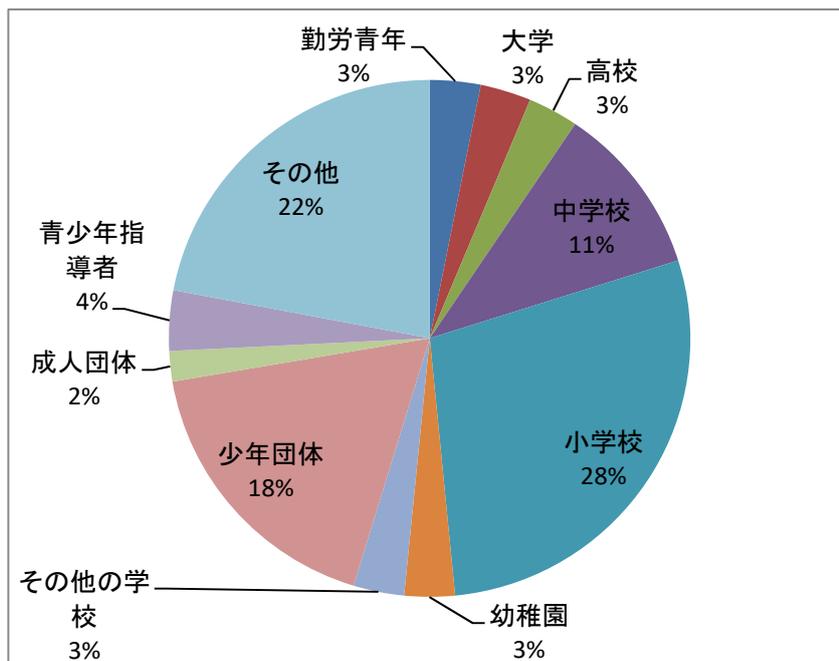
平成 19 年 4 月～平成 20 年 3 月

Ⅲ 調査の結果

1. 利用団体のプロフィール

まず、今回回答のあった利用団体のプロフィール（属性）を示すことにしよう。ここで取り上げるのは、利用団体の種類、利用団体の主たる年齢層、利用宿泊数の3つである。

利用団体の種類（単数回答）については、「小学校」が占める比率が最も高く28%、次いで「その他」（22%）、「少年団体」（18%）、「中学校」（11%）の順になっている（図1参照）。



「その他」の内訳（括弧内の数値は実数）

適応指導教室(3)、家族(2)、ボーイスカウト(2)、企業、看護学校、専門学校、障害者施設利用者、NPO法人、知的障害児学校、鼓隊、交流団体、青少年団体、市教育委員会青少年事業、患者家族・ボランティア、青少年赤十字、宗教団体、福祉施設、区教育委員会、少林寺拳法、社会教育団体、保育園、高文連自然科学専門部、民間保育サービス施設、アウトドアブランドによる実行委員会、知的障害者更生施設、小グループ、子ども会育成会、山岳会、エコクラブ、ガールスカウト、公民館、体育教室、親子、養護学校

図1 利用団体の種類

利用団体の主たる年齢層（単数回答）については、「7～12歳」が最も多く全体の半分以上を占めている。次いで高いのは「13～18歳」（21%）の比率が高い（図2参照）。

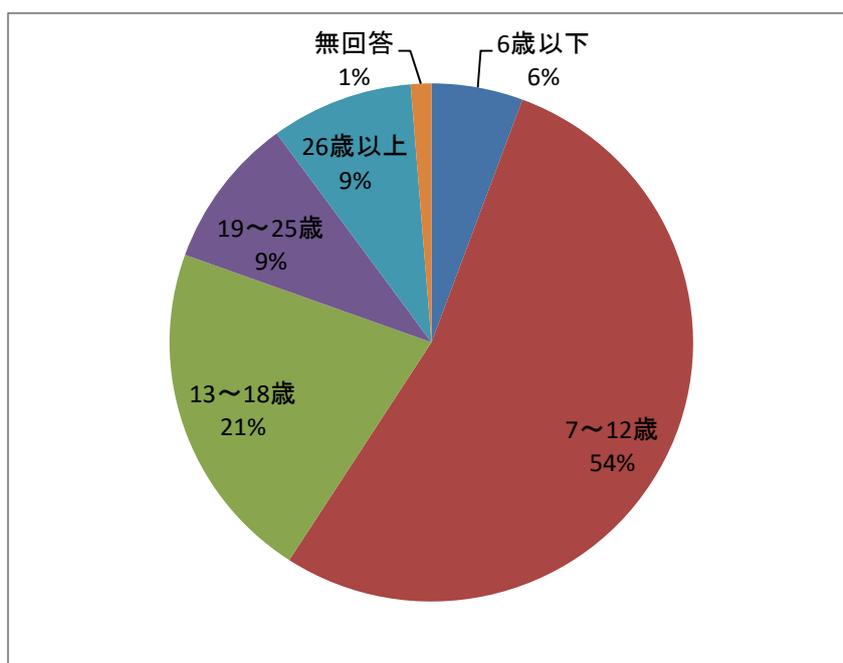


図2 利用団体の主たる年齢層

利用宿泊数（単数回答）については、「1泊」が最も多く5割近くを占める。次いで多いのは「2泊」で約3割である（図3参照）。

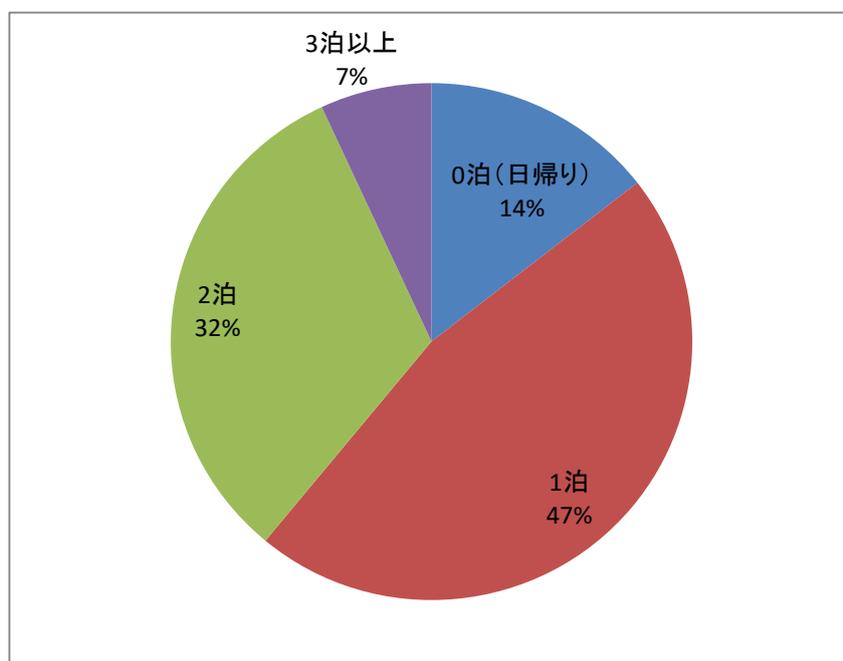


図3 利用宿泊数

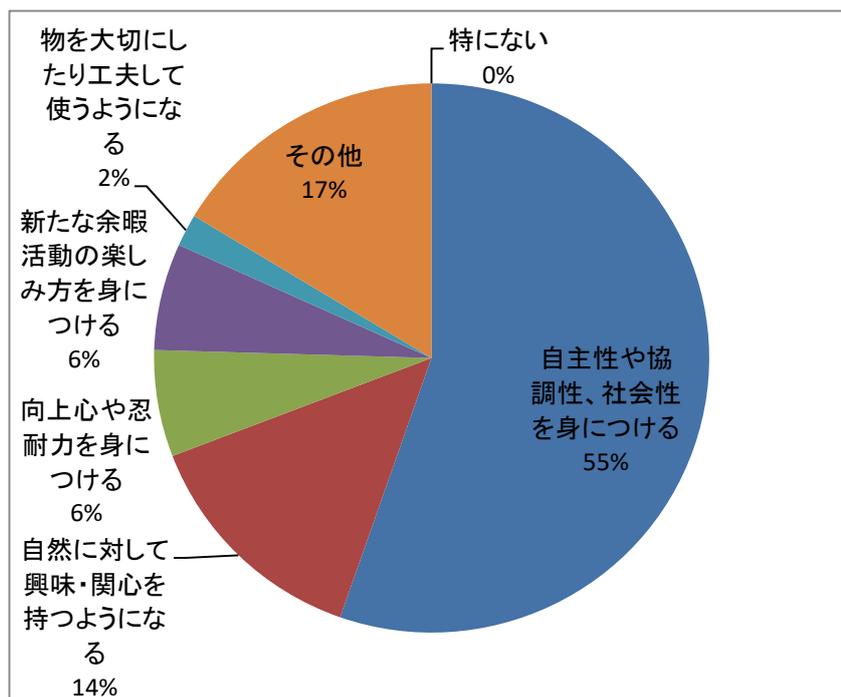
2. 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

次に、各団体が利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）（単数回答）を調べたと

ころ、「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も多く全体の半分以上を超えている。次いで「その他」(17%)、「自然に対して興味・関心を持つようになる」(14%)の順となっている(図4参照)。

なお、ここでの調査項目については、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議報告『青少年の野外教育の充実について』(平成8年7月)で挙げられている「野外教育の目標」および「野外教育に期待される成果」を参考にした。上記会議および報告については下記URLを参照(平成20年5月15日現在)。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/index.htm



「その他」の内訳

高校生活のオリエンテーション、宿泊学習、親睦を深め人間関係を作る土台を築く、人との交流、鼓隊演奏およびパレード練習、親元を離れて自信・独立心を育てたい、ありのままの日本を中国の子どもたちに知ってもらい日本と中国の子どもたちがお互いの国をより深く理解する、バドミントン部夏季合宿、自己注射・家族治療に対する正しい知識と技術の習得と親睦、技術の向上およびチームワークを深める、リーダー養成、2つの団体の交流を深める、野外活動の知識や技術を身につけ地域のリーダーとしての自覚と資質を高める、研修内容を身につけてもらいたい、スポーツ合宿の充実、親子で楽しく運動する、施設の運営やプログラムについて学ぶ、富士宮市に関心を持ってもらう、仲間同士でさらに交流を深め思い出の場でアウトドアを楽しむ、アイススケートの楽しさを味わう、冬のあそびの体験、ふだん体験できないスポーツに親しむ、スケートを通して冬の遊びに親しみ公共施設でマナーを守り安全に活動する、卒団する6年生とスケートで楽しい時を過ごし締めくくりの卒団式を行う

図4 利用を通じて参加者に期待したこと(利用目標)

この利用目標について、利用団体の属性別のクロス集計を試みたところ、全体で最も比率の高い「自主性や協調性、社会性を身につける」は「学校関係」の中では約2/3を占

めているが、「その他団体等」では5割足らずに留まっている。次いで高いのは、「学校関係」では「自然に対して興味・関心を持つようになる」(13%)で、「その他団体等」では「その他」で2割以上を占めている(図5参照)。なおここでは、サンプル数の関係で利用団体の種類を「学校関係」と「その他団体等」のどちらかにカテゴリ統合している。

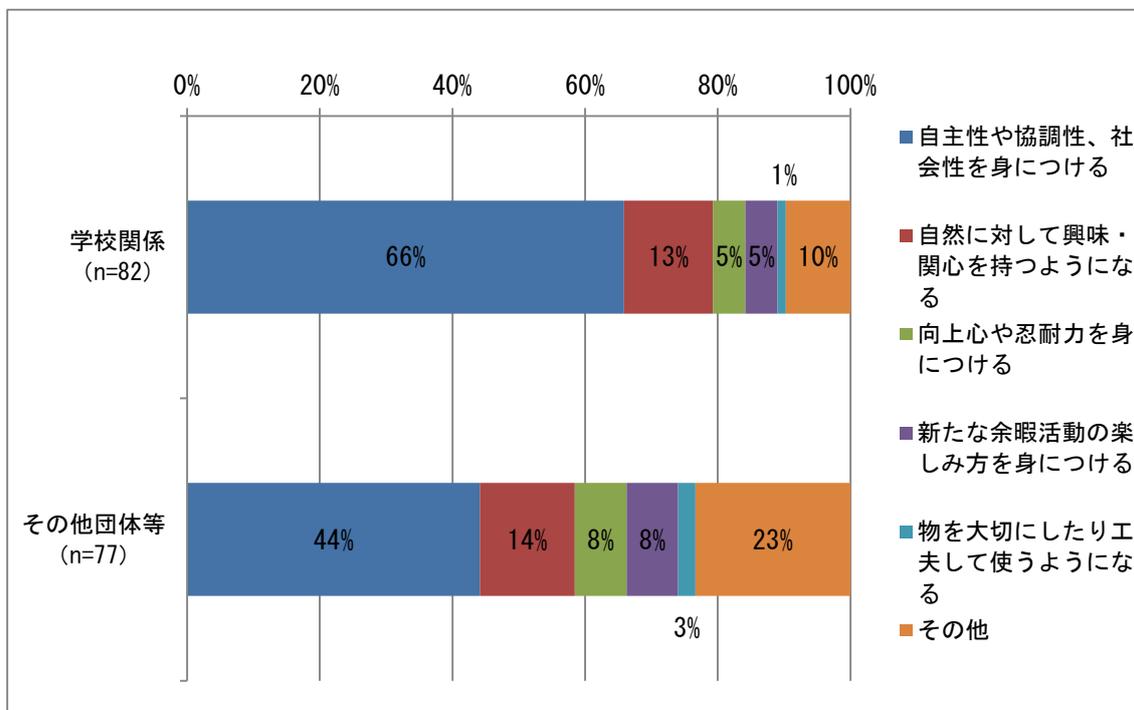


図5 利用団体の種類別にみた利用目標

利用団体の主たる年齢層別にみた利用目標については、「自主性や協調性、社会性を身につける」は、「12歳以下」では6割近くに達しているが「13歳以上」では約5割である。次いで高いのは、「12歳以下」では「自然に対して興味・関心を持つようになる」(15%)であるが、「13歳以上」では「その他」が約1/4を占めている(図6参照)。なお、ここでもサンプル数の関係上、利用団体の主たる年齢層を「12歳以下」と「13歳以上」のどちらかにカテゴリ統合した。

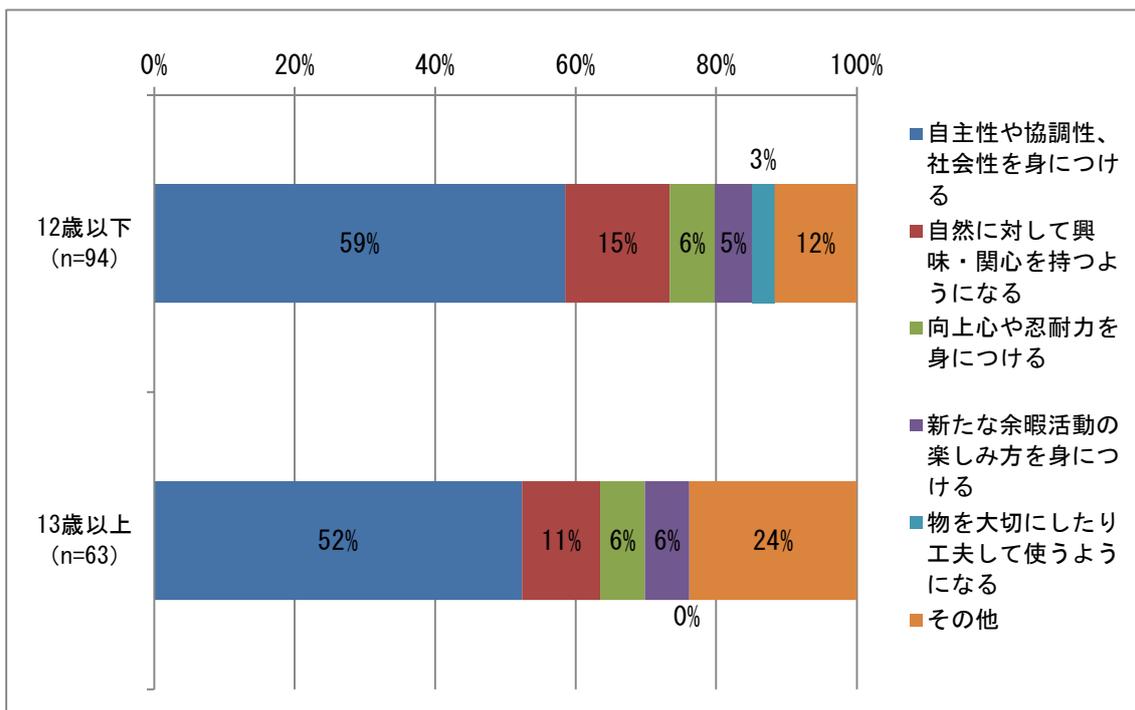


図6 利用団体の主たる年齢層別に見た利用目標

利用宿泊数別にみた利用目標であるが、これについては、「1泊」「2泊」「3泊以上」では「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も高いが、「0泊（日帰り）」では「その他」が最も高く約4割である。なお「0泊（日帰り）」における「自主性や協調性、社会性を身につける」は約2割である（図7参照）。

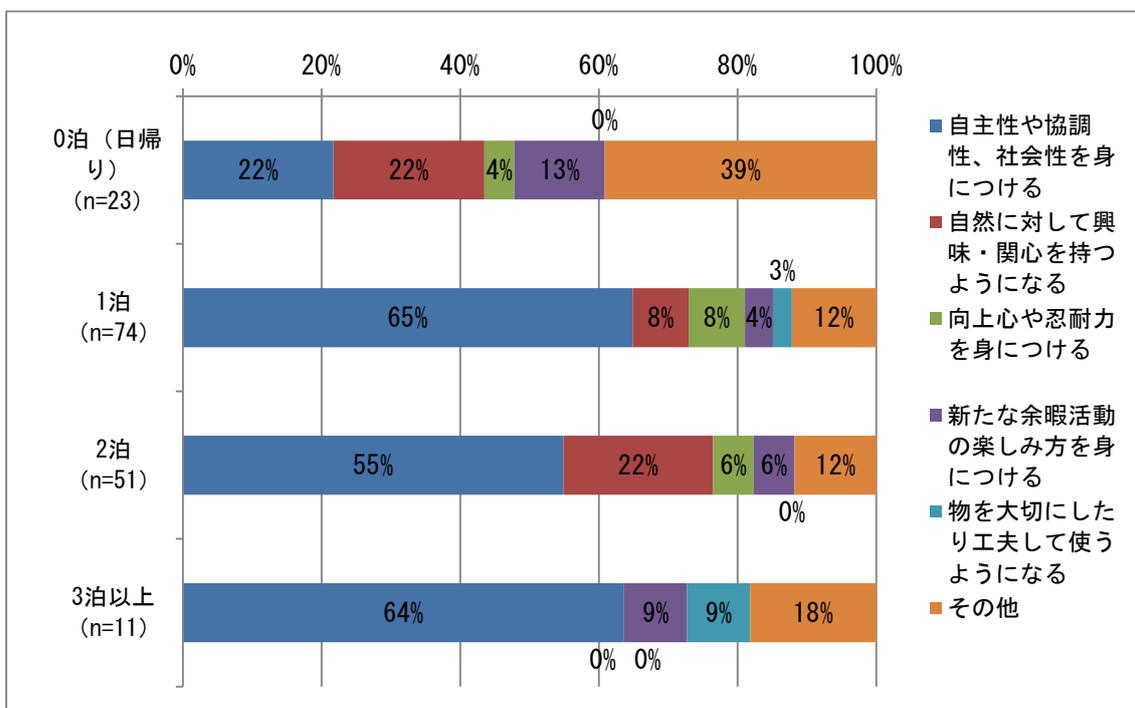


図7 利用宿泊数別にみた利用目標

3. 利用目標の達成度

利用目標の達成度については、各利用団体が挙げた「利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）」について、今回の利用を通じて期待通り達成できたかどうかを、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」「ほとんど期待通りできなかった」「まったく期待通りできなかった」のいずれかで各団体自身が判断した。その結果、「だいたい期待通りできるようになった」が全体の8割以上を占め、次いで比率の高いのは「期待以上にできるようになった」（16%）で、両者を合わせるとほぼ100%である（図8参照）。

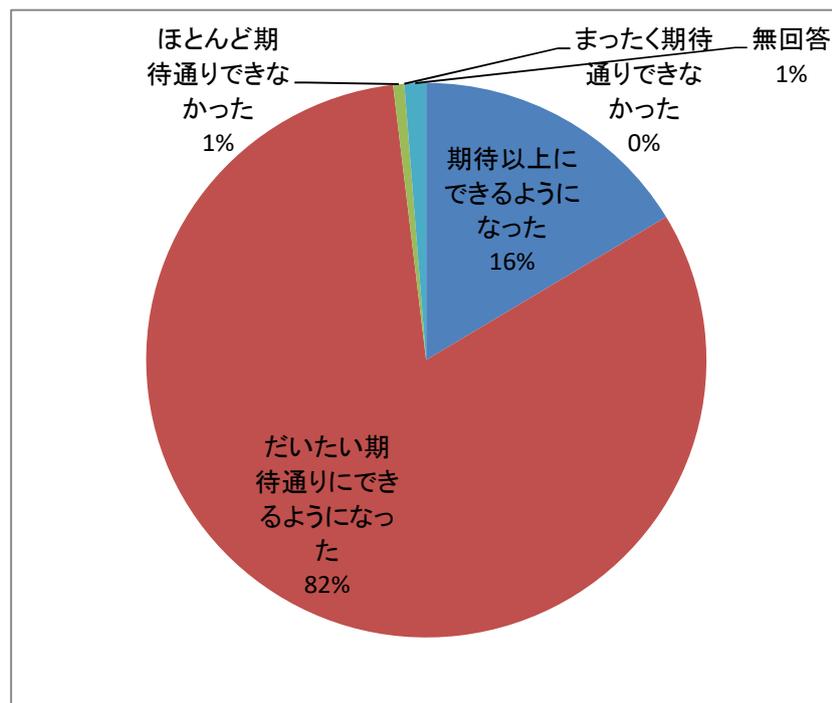


図8 利用目標の達成度

この利用目標の達成度について、利用団体の種類別にみると、「その他団体等」のほうが「学校関係」よりも「期待以上にできるようになった」が僅かに高く、2割近く達している。但しどちらの場合でも、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率がほぼ100%である（図9参照）。

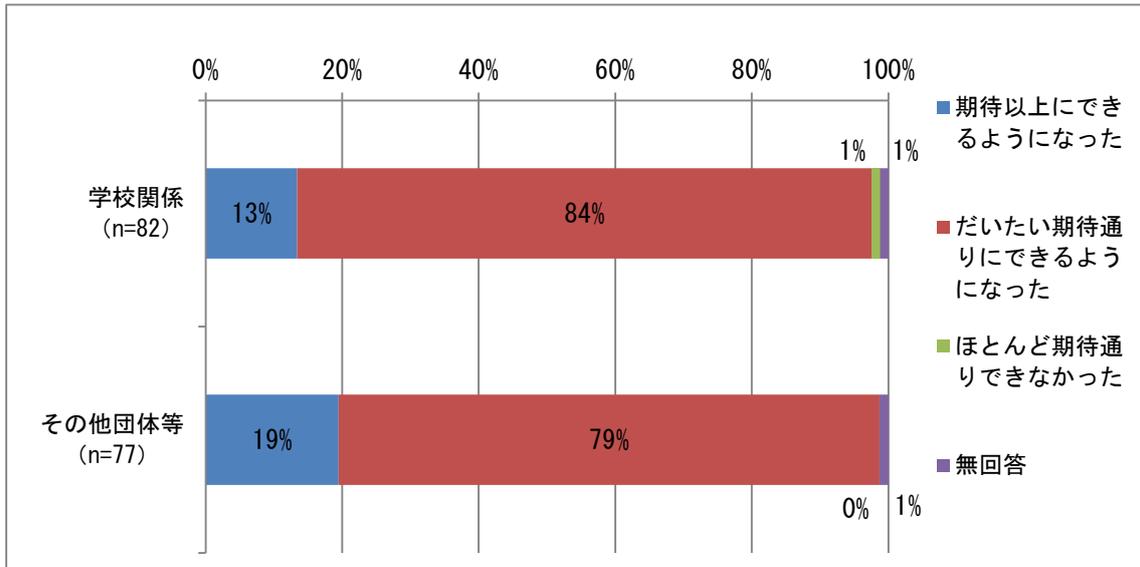


図9 利用団体の種類別にみた利用目標の達成度

利用団体の主たる年齢層別にみた利用目標については、「13歳以上」のほうが「12歳以下」よりも「期待以上にできるようになった」が僅かに高く2割近くである。但しどちらの場合でも、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率はほぼ100%となっている（図10参照）。

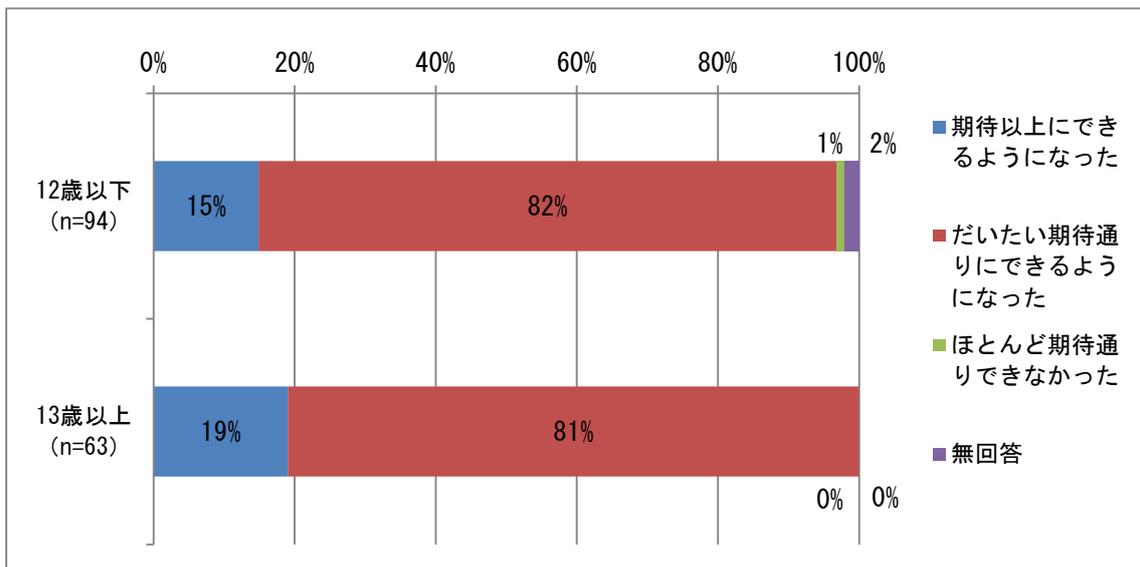


図10 利用団体の主たる年齢層別にみた利用目標の達成度

利用宿泊数別にみた利用目標の達成度では、いずれの宿泊数にあっても、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率はほぼ100%となっている。なお、「2泊」では「期待以上にできるようになった」が約1/4に達している（図11参照）。

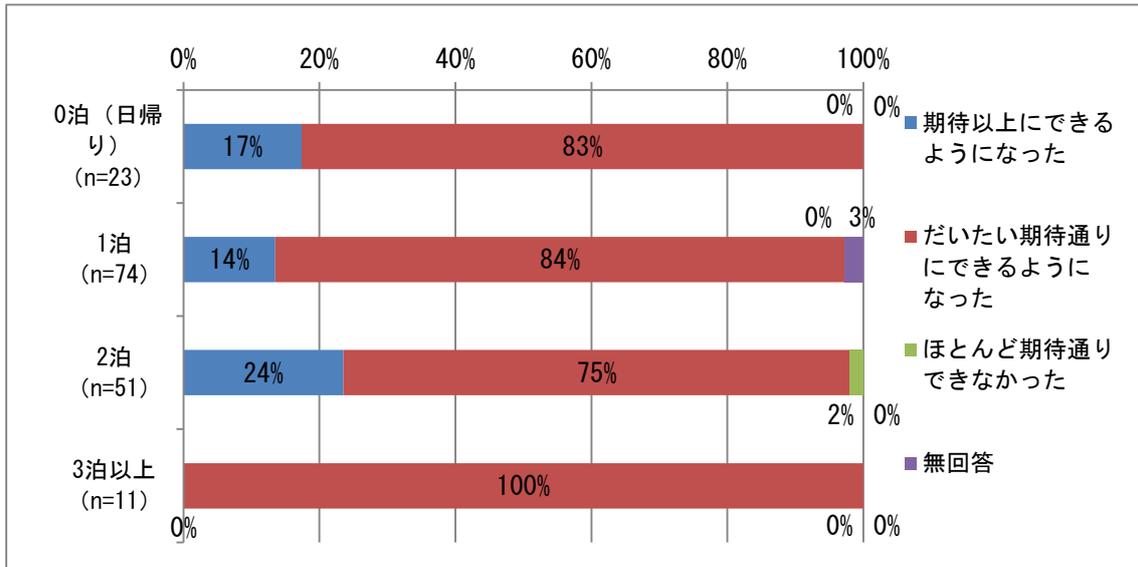


図 11 利用宿泊数別にみた利用目標の達成度

ここまでは、利用団体の属性別の集計結果を示してきたが、次に、利用目標の種類の違いでみた結果を示すと（図 12）、「期待以上にできるようになった」の比率が最も高いのは「その他」が利用目標となっている時で 1/3 を超えている。次いで高いのは「自然に対して興味・関心を持つようになる」の場合で 1/4 以上である。

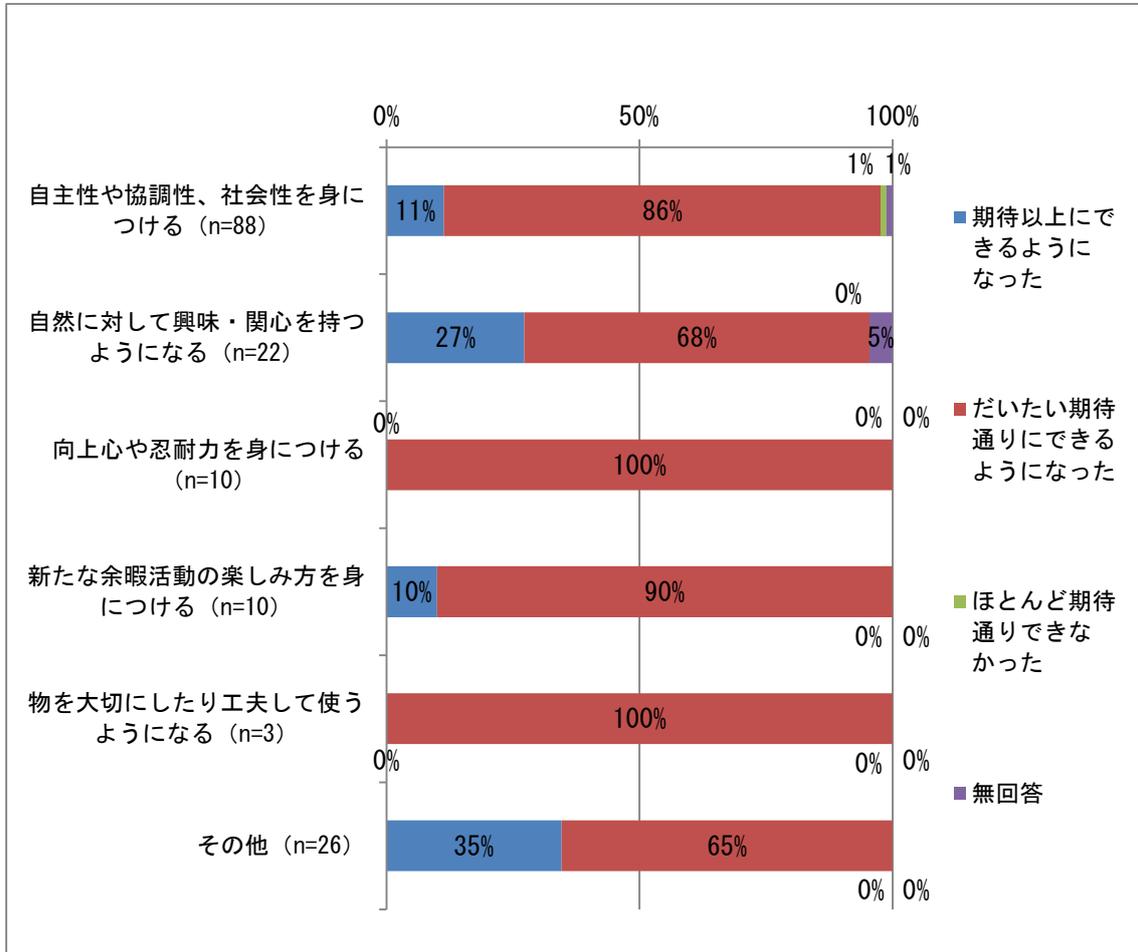
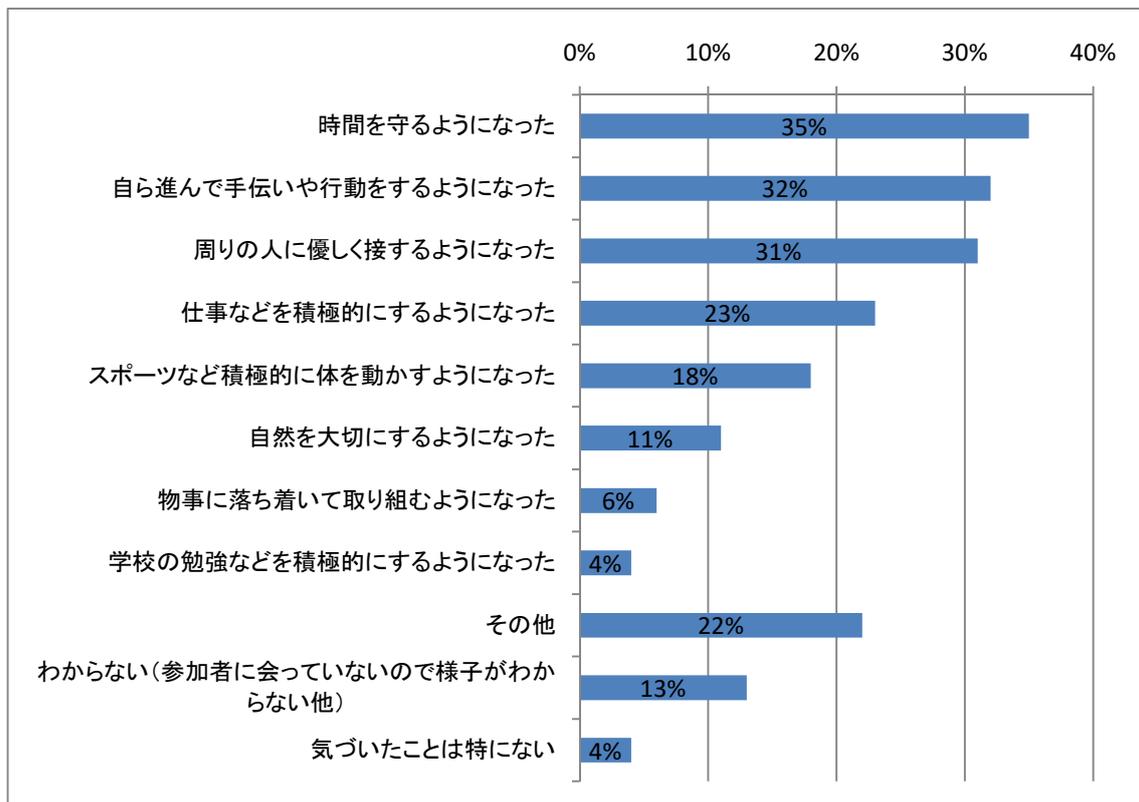


図 12 利用目標別にみた達成度

4. 利用後の参加者の変容

利用後の参加者の変容については、利用後1ヶ月以内の変容のみを利用団体担当者が分かる範囲で捉えたが（複数回答・3つまで）、それによると、「時間を守るようになった」が最も多く（35%）、次いで「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」（32%）、「周りの人に優しく接するようになった」（31%）となっている。なお「わからない（参加者に会っていないので様子がわからない、他）」という利用団体が1割強あった（図13参照）。



「その他」の内訳（括弧内の数値は実数）

親睦や交流が深まった(5)、協力するようになった(3)、自然に対する興味・関心が出てきた(2)、自信が
つき顔つきもたくましくなったように思う(2)、企画と運営においてリーダーシップを発揮することが
できるようになった、リーダーを中心とした活動ができるようになった、社会人としての自覚を持ち新たな
気持ちで仕事に取り組んでいる、最後までやりきること、話の聞き方が良くなった、約束を守るよう
になった、みな打ち解けて仮面が取れたように感じた、団体の中で生活するという、心の奥に「楽しい
空間」で過ごしたことが残るといいなと思っている、明るくなった、自分の周りのことがスムーズにでき
るようになった、協調性の向上、子どもの成長が分かり親と子が関わる良い機会になった、学びを深める
ことができた、あいさつを以前よりするようになった、感謝の気持ちを持つようになった、新たな余暇活
動などを知るきっかけになった、お互いの進路について考える時間が増えた、チームワークがより一層強
くなった、マナーがよくなった、何度か体験する事で少しずつ出来るようになったり楽しめたり気づくよ
うになっています、挑戦してみようとする気持ちが出てきた、冬の遊びに親しむようになった、新しいこ
とに挑戦し楽しむ術を知った、何でもやる前からできないと思わずチャレンジ精神も大事だと分かったよ
うでした

図13 利用後の参加者の変容

この利用後の参加者の変容を利用団体の属性別でみることにしよう。まず、利用団体の種類別にみた利用後の参加者の変容であるが（図 14）、「学校関係」では「時間を守るようになった」の比率が最も高く半数近くがこれを挙げている。「学校関係」で次いで高いのは「周りの人に優しく接するようになった」（38%）で、「仕事などを積極的にするようになった」（32%）が続いている。一方、「その他団体等」では「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」が最も多く挙げられており（35%）、次いで「スポーツなど積極的に体を動かすようになった」（26%）、「周りの人に優しく接するようになった」（25%）が続いている。なお、「わからない（参加者に会っていないので様子がわからない、他）」については、「その他団体等」のほうが多く挙げており約 2 割である。

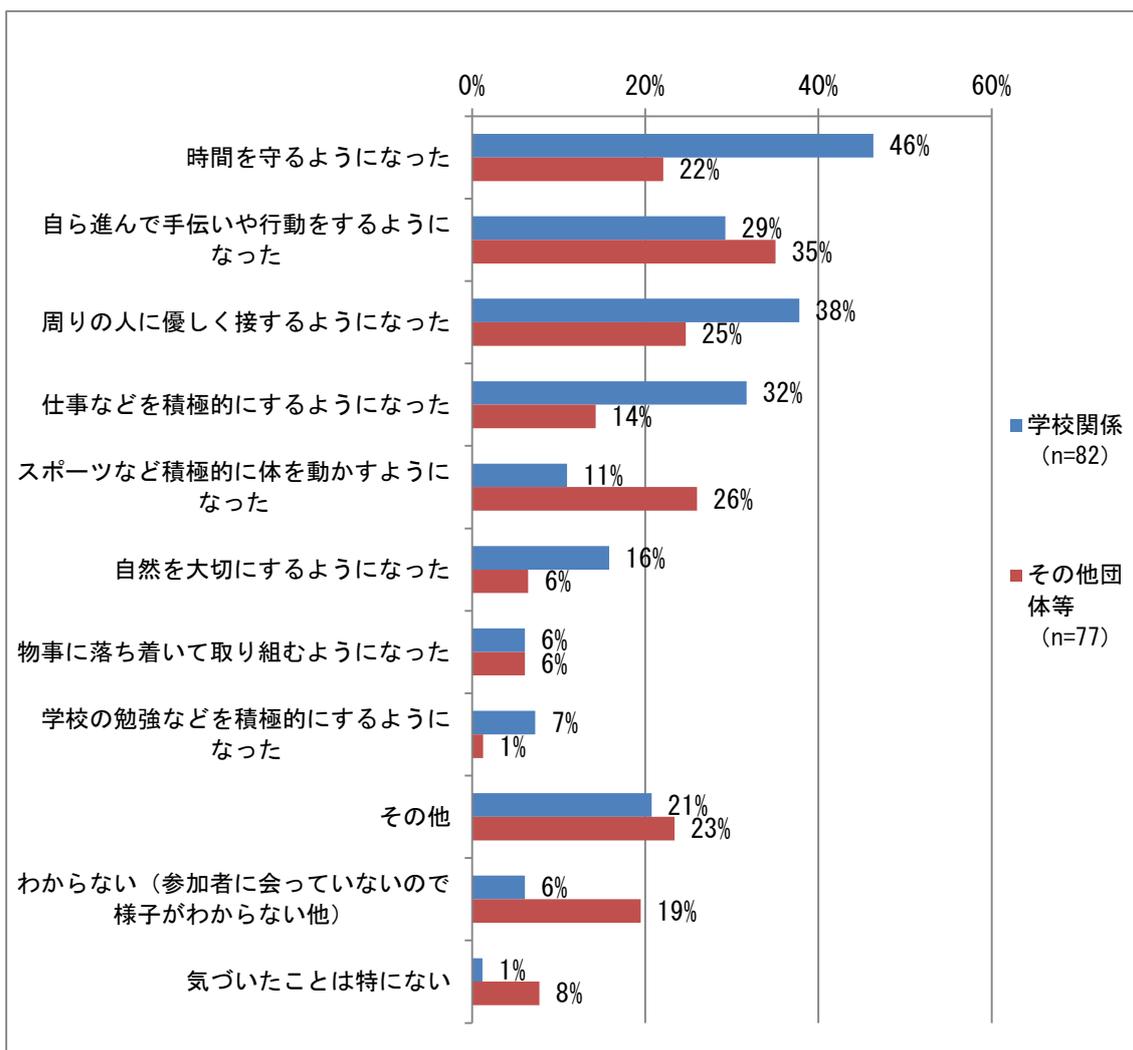


図 14 利用団体の種類別にみた利用後の参加者の変容

次に利用団体の主たる年齢層別にみると（図 15）、「12 歳以下」で最も多く挙げられているのは「時間を守るようになった」および「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」である（ともに 34%）。一方「13 歳以上」でも「時間を守るようになった」の比率が最も高いが（37%）、次いで高いのは「周りに人に優しく接するようになった」（35%）で

ある。なお、「12歳以下」と「13歳以上」の間で最も比率の開きがある項目は「仕事などを積極的にするようになった」で「13歳以上」のほうが9ポイント高い。

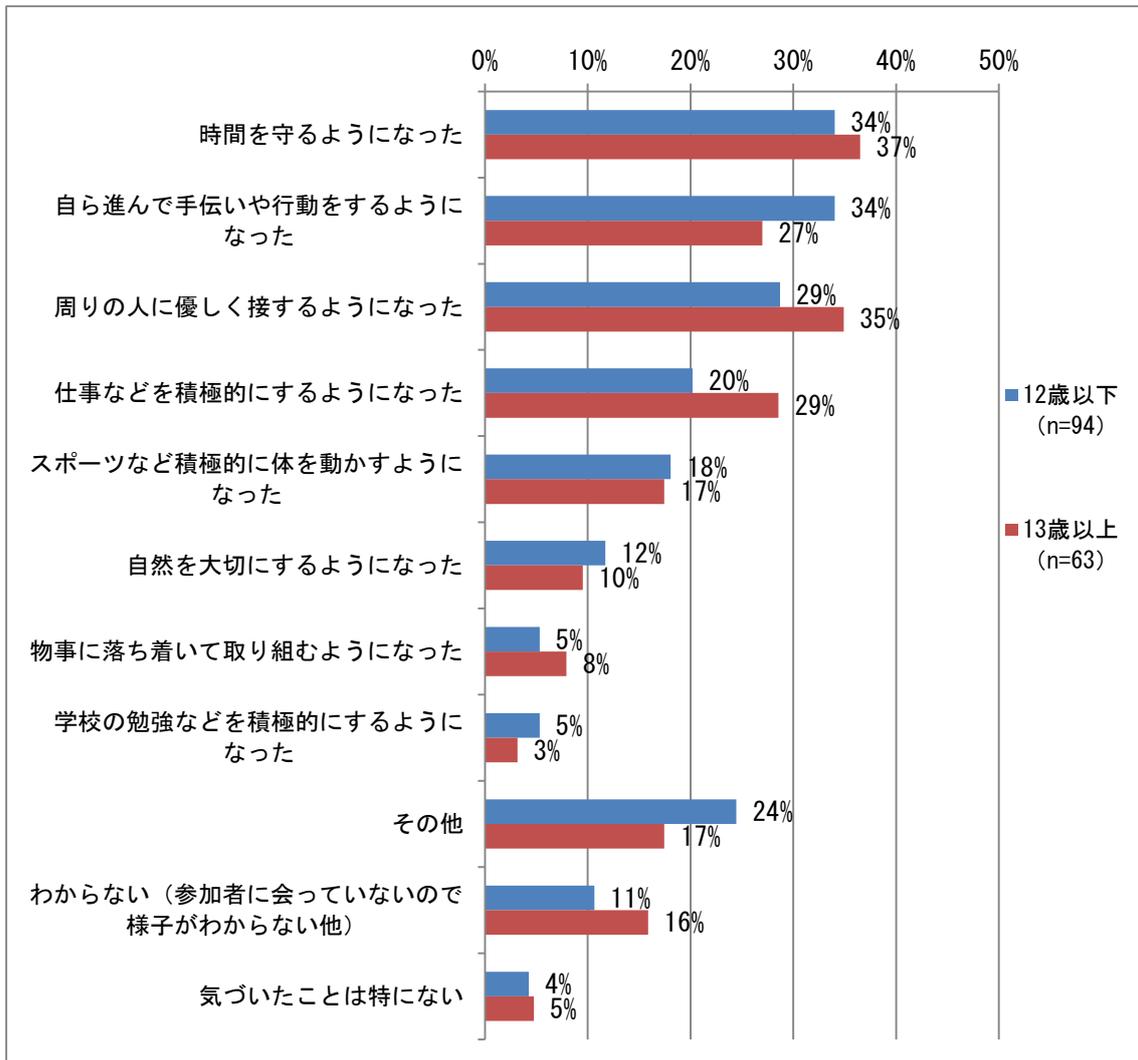


図 15 利用団体の主たる年齢層別にみた利用後の参加者の変容

利用宿泊数別にみた利用後の参加者の変容について述べると、「時間を守るようになった」は「0泊(日帰り)」では4%であるが、1泊以上はいずれの宿泊数でも30%を超えている。「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」では、0泊(日帰り)では10%足らずであるが、「1泊」は38%、「2泊」は29%で、「3泊以上」になると55%に達する。一方、「その他」については、「0泊」の場合が約4割で、その他の1泊以上では、いずれも2割程度である。「気づいたことは特にない」では、「0泊」の13%が最も高い比率である(図16参照)。

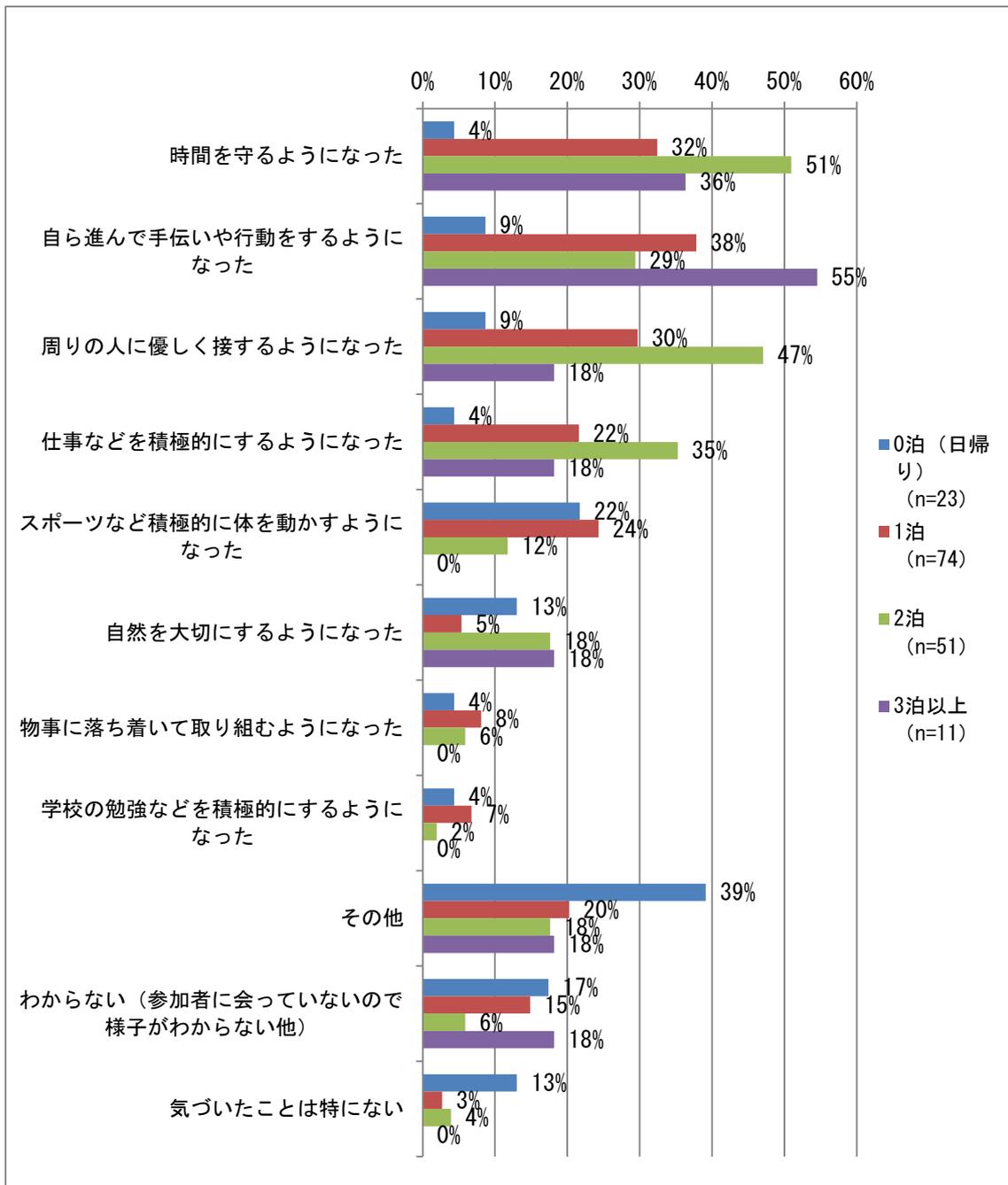


図 16 利用宿泊数別にみた利用後の参加者の変容

利用団体の属性別の利用後の参加者の変容は以上の通りであるが、さらに、これを利用目標の違いでみるとどのような違いが見られるかを検討した結果を示すことにしよう。その結果が図 17 であるが、それによると、「時間を守るようになった」は、利用目標が「自主性や協調性、社会性を身につける」のときに 45%である。「周りの人に優しく接するようになった」もこの目標のときには 40%に達する。「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」は、利用目標が「新たな余暇活動の楽しみ方を身につける」の場合に 40%に達し、「その他」は、利用目標が「その他（物を大切にしたり工夫して使うようになる）」も

含む)」のときに 45%になっている。

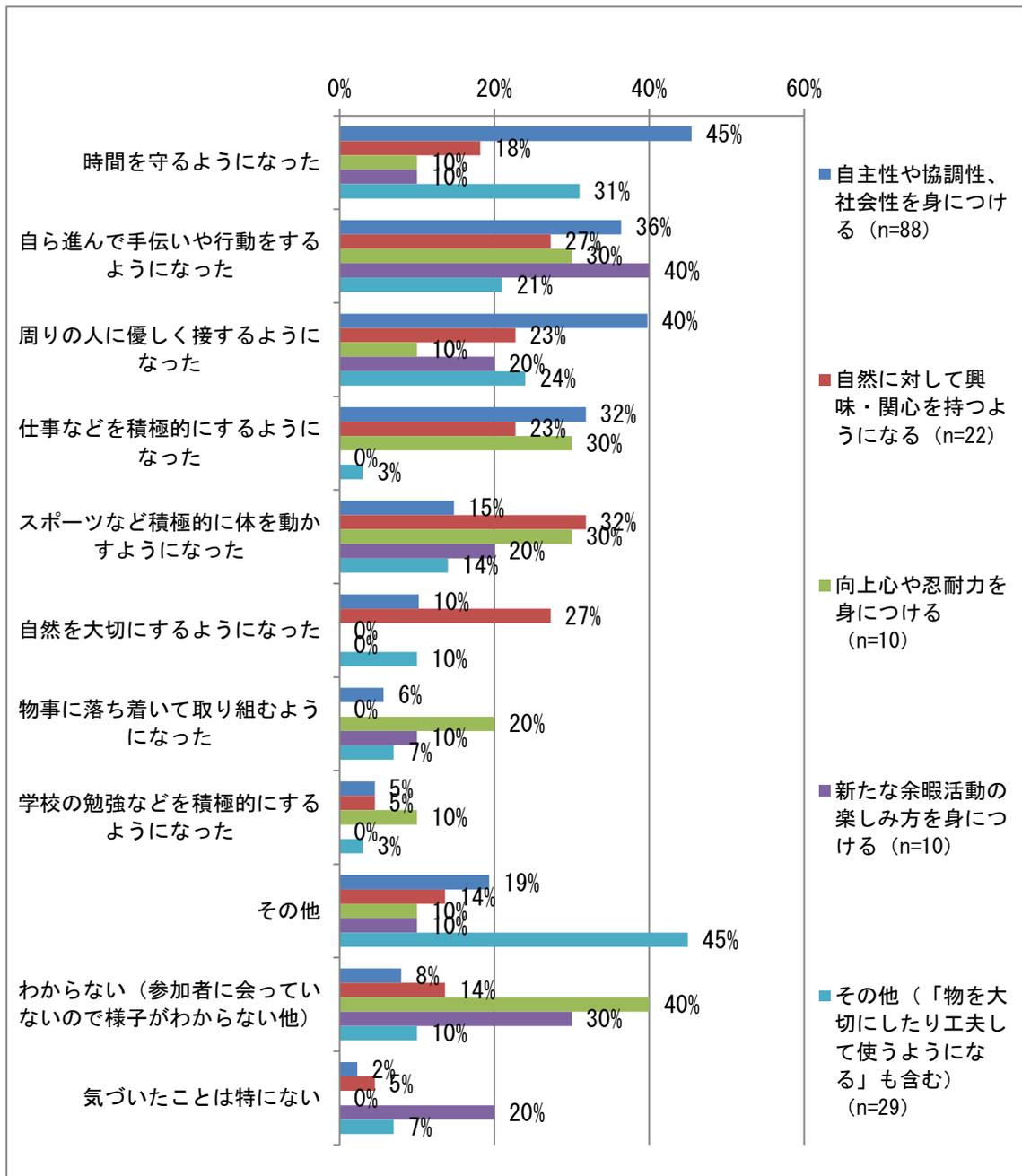


図 17 利用目標別にみた利用後の参加者の変容

図 17 は利用目標の種類別にみたものであるが、その目標の達成度別にみると、利用後の参加者の変容はどのようになるであろうか。それを集計したものが図 18 である。それによると、「周りの人に優しく接するようになった」は、「期待以上にできるようになった」(46%)のほうが「だいたい期待通りできるようになった」(29%)よりも17ポイント高くなっている。なお、利用目標の達成度が「ほとんど期待通りできなかった」と「まったく期待通りできなかった」の場合の比率については、それぞれの母数が僅かであるので、ここでは除いてある。

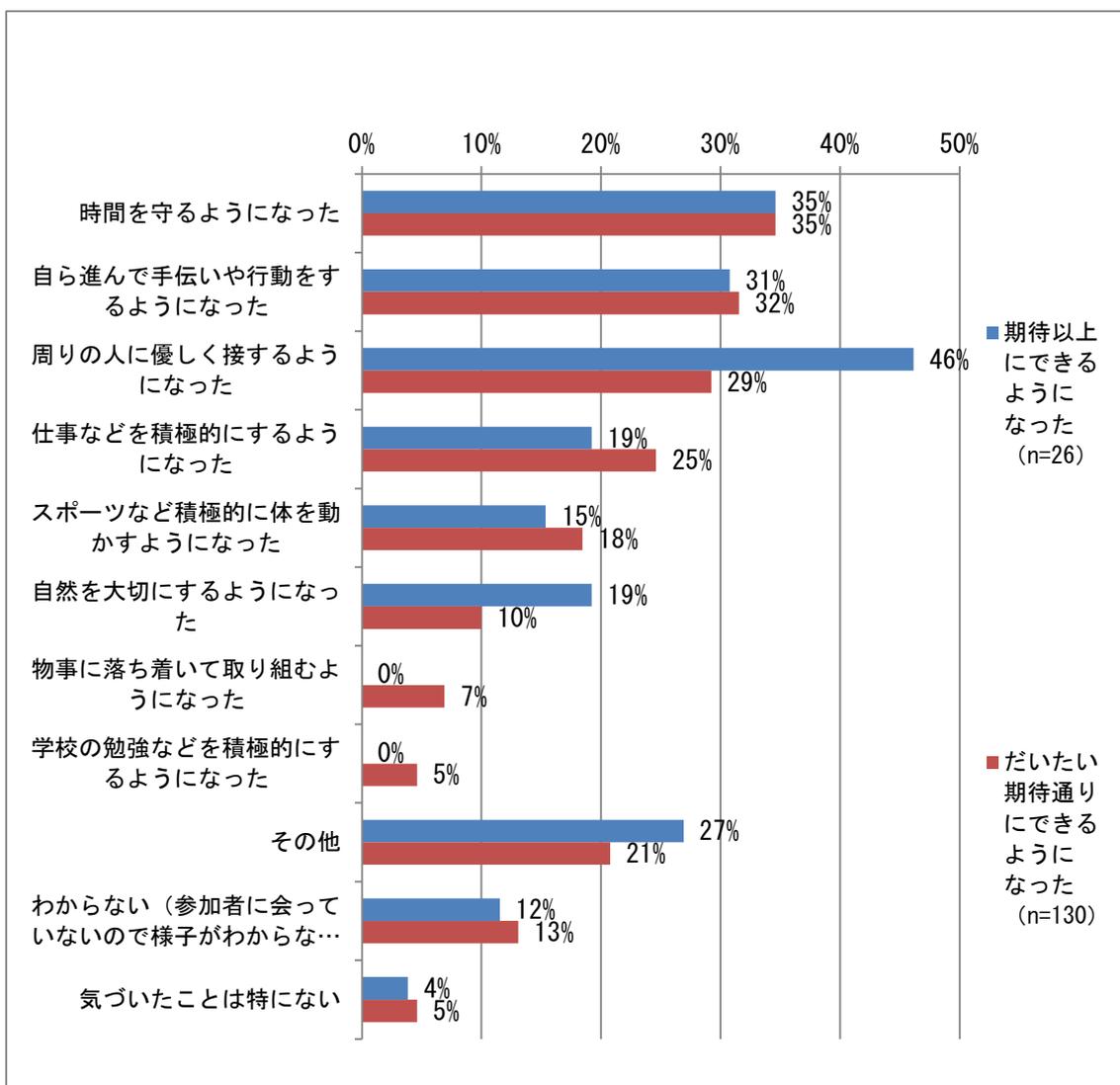


図 18 利用目標の達成度別にみた利用後の参加者の変容

IV 調査結果のまとめと今後の課題

ここまでで示してきた調査結果を整理すると、次の4点にまとめられる。

その第1は、利用団体のプロフィールから、センターの代表的な利用者が小学生で、1泊の利用が最も多いということである。利用団体の種類は、学校関係が全体の半数を占めており、特に小学校は全体の約3割である。その他、少年団体の利用もあるので、利用団体の主たる年齢層は、小学生相当の7~12歳が半数以上となっている。また利用宿泊数も全体の半数近くに達する。このことは、センター利用団体の大まかな特徴を掴む上でまず必要な結果であると言える。

第2は、利用目標は宿泊の有無によっては顕著な違いが見られることである。全体では、半数以上が「自主性や協調性、社会性を身につける」であるが、これは1泊以上の宿泊をとる利用の場合に見られる傾向で、「0泊（日帰り）」の場合はむしろ、「その他」が最も多いのである。また利用団体の種類別でも若干の違いが見られ、「学校関係」を除く「その他団体等」の場合でも「その他」が2割以上を占めていることに注意する必要がある。

第3は、利用目標の達成度は殆どが「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」であり、さらに利用目標の種類によっては「期待以上にできるようになった」の比率が高いことである。具体的には、利用目標が「自然に対して興味・関心を持つようになる」や「その他」の場合、「期待以上にできるようになった」の比率が3割前後となっている。この傾向が、利用目標そのものの特徴の違いによるものなのか、利用団体の運営等の影響によるものなのかまでは今回は分からないが、今後このような達成度を検討する際の基礎資料の1つとなるであろう。

そして第4は、利用後の参加者の変容は「時間を守るようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「周りの人に優しく接するようになった」で上位3項目であることと、この変容は宿泊の有無によって違いが見られるということである。上で挙げた「時間を守るようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」などは、1泊以上の宿泊をとる場合に顕著に見られるものであり、一方、「0泊（日帰り）」では「その他」の変容が最も顕著に現れている。このことは、宿泊を伴うことで得られる教育的効果があるとともに、たとえ日帰り利用であっても宿泊の場合とは別の教育的効果があるというように、参加者に期待される教育的効果には、宿泊の有無によってさまざまなタイプが存在する可能性を示唆している。

今回の調査に限れば以上のようなことが仮説的に挙げられるが、最後に調査上の今後の課題を2点述べておくことにしよう。

その第1は、継続して次年度以降も調査を行うことにより、経年変化の傾向を掴んでいくことである。これを行うことにより、年度によって変化していく予算や人員面等の違いによる、教育的効果の違いも探ることができると考えられる。第2は、教育的効果というものは、僅か1回利用することで現れる場合もあれば、繰り返し利用していくことではじめて現れる場合もあるので、繰り返し利用することで現れる潜在的な教育的効果のほうも追究していくことである。他にもさまざまな課題が挙げられるが、以上の2点は急ぎ取り組んでいく必要があるだろう。